

経済評論家

岡田 晃

歴史に学ぶ

第十五回 「悲運の武将」の子が苦難乗り越え鴻池財閥を創設

「七難八苦」の人生だった山中鹿介

「我に七難八苦を与えたまえ」と月に祈った逸話で有名な山中鹿介。主家・尼子家が滅亡、同家の再興をめざして戦い続けたものの願いかねず非業の死を遂げた悲運の武将として知られ、現代の戦国ファンの間でも人気は高い。だが、その息子が戦火を逃れて他国で隠れ住んだのち、商人に転身し鴻池財閥の祖となつたことはあまり知られていない。

まず山中鹿介のことから始めよう。諱は幸盛

織田信長の支援を得ることに成功、秀吉の指揮下で毛利軍と対峙することとなる。これで尼子再興

に一筋の光が見えたかに思えた。

だが運命は再び暗転する。姫路城を拠点としていた秀吉は、備前との国境に近い上月城（現・兵庫県佐用町）に鹿介ら尼子再興軍を守らせ、毛利方への最前線としたのだが、その後、姫路の東方にある三木城の別所長治が毛利と通じて信長に反旗を翻し、それと呼応するように毛利軍が上月城を包囲したのだ。

秀吉は上月城の救援に向かつたものの手前で毛利軍に遮られたうえ、信長から「三木城への攻めを優先せよ」との命令が届いたため、やむなく撤退。孤立無援となつた上月城の尼子再興軍は毛利軍に攻められ滅亡した（一五六七年）。

上方に落ち延びた鹿介は二年後、尼子氏の遺児・勝久を擁して挙兵した。尼子再興をめざして出雲など山陰各地で転戦するが成就せず、戦いは十年近くに及んだ。ようやく一五七八年になつて

息子・新六も苦難の少年時代

こうして文字どおり「七難八苦」の人生だった鹿介だが、新六（または新右衛門）という幼い息子がいた。新六は生まれて間もなくの頃、鹿介が尼子再興の戦いに奔走中という事情もあってか、親戚の黒田氏（別所氏の家老）に預けられた。だが八歳の時、養父・黒田氏の主人である別所長治が毛利方に寝返つたことがきっかけとなつて、前述のように実父・鹿介が殺される。続いて今度は、別所氏が秀吉に攻められ切腹、黒田氏も滅びる結果となつた。悲運の武将の息子もまた悲運に見舞われたのだった。

流浪の身となつた新六は、大叔父を頼つて摂津国鴻池村（現・兵庫県伊丹市）に落ち延びたといなつた。鹿介は捕虜となつた後、毛利の家臣によつて謀殺されたのだった。享年二十四（諸説あり）。

性があつたためか、山中鹿介の子であることは隠していたという。こうして苦労しながら成長した新六は十五歳で元服し、幸元と名乗つた。

ほどなくして幸元は武士を捨て商人として生きることを決心する。伊丹はもともと酒づくりが盛んだったことから、地元産の酒の行商から始め、続いて「鴻池屋」の看板を掲げ、醸造を始めたと伝わっている。時期は不明だが、遅くとも慶長年間（一五九六年）のこととみられる。

清酒開発に成功、江戸で大人気 の事業発展の四つのポイント

その頃までの酒はすべて濁り酒だったが、幸元は一六〇〇年頃に清酒の開発に成功した。これが事業発展の起点となる。言い伝えによれば、店で叱られた下男が腹いせに酒樽に灰を投げ込んだ

清酒誕生のエピソードは後世の脚色の可能性もあり、鴻池を清酒発祥の地とすることに異論もあるが、鴻池屋をはじめとする伊丹酒が江戸でも人気を集めたのは事実だ。江戸では、上方から送られた名産物を「下り物」として珍重されたが、伊丹酒はその筆頭だった。

こうして幸元の事業は飛躍的に発展した。そこには四つのポイントがある。

第一は、新市場の創出と製品の高付加価値化だ。清酒は新製品という次元を超えて、全く新しい市場を創り出した。さらに、良質の精白米を惜しみなく使い、品質の評価を高めた。

第二に、マーケティング戦略だ。当時は徳川家康が江戸に入府して間もない頃で、江戸の都市開発が進んでいた。一六〇〇年以後は戦乱もほぼ終わり、人口も急速に増えていた。幸元は、江戸での需要が急拡大すると読み、いち早く江戸への出荷に乗り出したのだ。当初は馬で運搬していた。

第三は、事業の多角化戦略。大坂夏の陣（一六一五年）が終わつた後、幸元は大坂でも醸造を始めるとともに、船での運搬を開始した。さらに酒

ころ、酒が濾過されて翌日には清く澄み渡り、香味も良くなつていていたという。幸元はこれをきっかけに清酒を大量生産する製法を確立したのだ。

清く澄んだ酒はたちまち評判になり、遠く江戸にまで出荷するようになつた。鴻池屋の屋敷跡に残る「鴻池稻荷祠碑」には「鴻池家は初めて清酒を製造し財を成した。これにあやかつて、近隣の伊丹や池田から灘、西宮など数百軒の酒造家が起つた」と記されている。

第四は、事業承継の成功だ。幸元には息子が八人いたが、大坂へは息子たちが先行して進出し、事業の腕を磨いていた。その後、それぞれ分家し、伊丹鴻池の山中本家は七男、大坂の事業は八男・正成が継いだ。正成は、前述の海運業進出の際はまだ十八歳だったが、この新規事業を担つて成功させた。父・幸元死去（一六五一年）の翌年には両替商を正式に開業している。この正成の系統が、江戸時代有数の豪商となり、明治から戦前まで鴻池財閥を形成することになる。

こうして幸元は鴻池財閥の始祖となつた。父・鹿介の代から続いた「七難八苦」の人生がようやく報われたと言える。その苦難と事業成功の歩みは、現代の我々を勇気づけると同時に、危機を乗り越えるヒントを与えてくれている。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。
編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長を務める。
二〇〇六年から大阪経済大学客員教授（今年三月退任）。

とともに他の物資も船で運ぶようになった。海運往来も活発化。また各大名は大坂に蔵屋敷を作り、国元で収穫した米を大坂に運んで換金していた。それら米の運搬や参勤交代に伴う物資の輸送を、鴻池が請け負つたのだ。さらにその関係から大名への資金の貸し付けも始めた。この事業は後に両替商として発展していくことになる。

やがて参勤交代が制度化され、西国と江戸との往来も活発化。また各大名は大坂に蔵屋敷を作り、国元で収穫した米を大坂に運んで換金していた。それら米の運搬や参勤交代に伴う物資の輸送を、鴻池が請け負つたのだ。さらにその関係から大名への資金の貸し付けも始めた。この事業は後に両替商として発展していくことになる。

